

ドイツ裸体運動における身体

齋藤昌人

(高知大学人文社会科学系人文社会科学部門)

Das Körperbewusstsein in der Nacktkultur in Deutschland

Masato SAITO

Humanities and Social Sciences Unit, Humanities and Social Cluster, Kochi University

Abstract: Die Nacktkultur kommt aus den Lebensreformbewegungen des 19. Jahrhunderts, und wie andere Zweige dieser Reformbewegungen – Vegetarismus, Abstinenzlerum, Wohnungsreform, Gartenstadtbewegung, Naturheilkunde, Licht-Luftbäder, Gymnastik, Reformmode, Neuer Tanz usw. – beschäftigt sie sich wesentlich mit der Gesundheit des Körpers. Unter dem Einfluss des Sozialdarwinismus und in der Auseinandersetzung mit der bürgerlichen oder christlichen Position gegenüber Sexualität und Nacktheit aber nimmt die Nacktkultur eine eigene Richtung. Die körperliche Gesundheit wird mit der geistigen Gesundheit gleichgesetzt, und „der schöne Körper“ wird im Zusammenhang mit der Nation oder dem Volk idealisiert dargestellt. Während es in der Nacktkultur so einen idealisierten, also eingeschränkten Körper-Begriff gibt, tritt ihm in anderen Zweigen der Reformbewegung ein ganz anderer, freier Körper entgegen, z.B. in der Wandervogelbewegung oder im Neuen Tanz. In diesem Artikel wird beschrieben, wie man über den Körper spricht und schreibt.

キーワード：裸体運動，生活改革運動，身体，ドイツ

Schulswort: Nacktkultur, Lebensreformbewegung, Körper, Deutschland

はじめに

裸体運動は、生活改革運動 (Lebensreform) の一つとして位置づけられることができる。ただ、生活改革運動の多くが、より直接的に身体健康や生活の向上を目指したのに対し、裸体運動は、もちろんそのような個人の健康という枠組みの中で広がりながら、その後の展開において、個人の身体上の健康というレベルを超えた次元で語られることが多い。

たとえば、ウーヴェ・シュナイダー (Uwe Schneider) は、「20世紀初頭の10年間で、美の崇拜と民族衛生学と結びついた裸体運動のイデオロギー化」¹が進行したとし、またウルリヒ・リンゼ (Ulrich Linse) に拠れば、裸体運動は、その後「ワイマール時代に大衆の余暇活動という現象として広まり、当初持っていたイデオロギー性や組織性という色合いは薄まっていった」ともされている。²

ここでは、自然治癒療法の中から生まれてきた裸体という概念が、その後裸体運動へと展開していくプロセスを再確認することによって、身体そのものがどのように意識されてきたか、あるいはどのように位置づけられてきたかを見ていきたい。

1. 裸体運動のルーツ

裸体運動のルーツは、政治的な革命への停滞感のもと「革命よりも改革を」³というスローガンのもとにくられる「生活改革運動」に求めることができる。⁴そもそも生活改革運動では、「菜食主義、禁酒運動、禁煙運動、動物愛護、反予防接種、反生体解剖、住居改革、田園都市、移住運動、自然治癒、日光・空気浴、裸体運動、体操運動とスポーツ、服飾改革、性改革、教育改革、ダンス運動」⁵等、様々な流れが交錯し、それぞれの運動の間の境界を明確に区分するのは難しい。どこに、そしてどのように力点を置くかによって、それぞれの運動の間で相互に関係し合いながらも分岐しているのである。裸体運動は、そのような「生活改革運動」を織りなす一本の糸でありながら、同時に様々な生活改革運動を「運動」という観点から見た場合、それらの間をつなぐという役割も果たしている。では、その裸体運動とはどのようなものなのだろうか。

その後の裸体運動にもつながっていく「自然治癒療法に大きな影響を及ぼした」⁶人物として、「太陽医」⁷と称されるスイスのアーノルト・リクリ (Arnold Rikli, 1823-1906) を挙げることができる。リクリは、水治療の開祖、そしてその意味で官製医学への不信に根ざした自然治癒療法の草分けとも言われている偉大なる素人医者ヴィンセンツ・プリースニッツ (Vincenz Priessnitz) の「一番弟子」⁸を自称するカール・ムンデ (Carl Munde) の著作に親しむ中で、「自然治癒療法の熱狂的な信奉者」⁹となった。自然治癒に関する文献をことごとく読破し、自ら水治療の実践に携わるようになり、現在のスロベニアに自然治癒の施設を建設するのである。¹⁰彼は、「水はもちろん良し、しかしながら空気はもっと良し、光はもっとも良し」 („Wasser tut's freilich. Höher jedoch steht die Luft, am höchsten das Licht!")¹¹というモットーのもと、いわゆる「大気治療」の創設者とされ、¹²「日光浴と大気浴」を重要視する彼の「光-空気セラピー」においては、「大気や水の中、そして日光のもとに裸体を置くことによって、身体に純化作用が起こる」のである。¹³

とはいえ、リクリは必ずしも日光、とりわけそのもとでの裸体を推奨していたわけではなく、それは彼が当初行っていた治療法の副産物ということもできる。そもそも、水治療から出発したリクリにとって、日光は治療の一環として重要視されていた発汗作用を促すための「熱」をもたらすものに過ぎなかった。「患者」は「簡単な服を身につけ」、「ほぼ 45 分日光に当たる。引き続き分厚い

毛布に身をくるみ 15 分日光に当たり、発汗が終わると水によるクールダウンが行われる」¹⁴のである。

もっとも、そのやり方が従来の治療法に比べ優れているという結論は得られず、リクリはより直接的な手段をとる。つまり「自然は、我々の器官が必用としている全てを提供する」¹⁵との考えのもと、衣服の保護なく治療を行うことにするのである。その治療法は、「根元的な自然の状態に最も近い形態」、つまり「空気と太陽の影響に直接身を晒す」というものであり、それによる治療の効果は確実に保証される」¹⁶のである。

当初このやり方は「大胆でほとんど無責任な冒険」と見なされ、受け入れられなかった。「冷たい空気と厳しい天候は服を身につけていない身体を弱め、結果として風邪や重病を引き起こす」¹⁷とされたのである。だが彼は自らの考えを変えることなく、自身が実験台ともなってデータを集め、患者達を辛抱強く説得することによって、最終的に彼の日光-空気浴療法は彼の治療施設のもっとも重要な治療法となるのである。¹⁸

リクリが導入した裸体のもとの日光-空気浴に立ちはだかる障害は、日光の暖かさこそ治療の本質とされていた従来の自然治癒療法の考えだけではない。ある意味それ以上に大きな障害となったのが、裸体にまつわる風紀上の問題である。もちろん施設内では「上品さの規則が損なわれることなく」¹⁹裸体は実践されていた。リクリは裸体の実践をさらに拡大するため、日光-空気浴のための特別の「制服」を考案し、外部の目につくところではそれを身につけ、外部の目が届かないところでは簡単に裸体になれるようにしたのである。²⁰リクリの施設には多くのゲストが訪れ、「自然治癒を宗とする様々な協会がその後大都市周辺に作り上げた多くの施設のさきがけ」²¹となるとともに、裸体運動の源流ともなったのである。

2. 身体之美

そもそも「自然治癒療法は、日光空気崇拜へ至らなくてはいけない」²²とするリクリの信念それ自体が、その後のイデオロギー化への可能性を有するものであるが、彼が始めた日光-空気浴が、「裸体運動」という形へと変化し定着していくプロセスには、いくつかの運動が関係している。それは、個人の健康という当初の枠組みとはまた別の次元で、身体そのものが新たにとらえ直されていくプロセスを示すものともなっている。では、その新たな身体とはどのようなものだろうか。

そのためにまず健康と裸体との関係をもう一度見ておこう。自然療法家のあいだでは、「人間の体内燃焼から生じる分泌物」には毒があり、その毒を拡散するためには空気の循環が必用だという考えが根強い。従って空気の循環が滞る閉ざされた空間は彼らにとっては大問題であり、屋外での滞在が最適とされるのである。「誰しも、毎日何時間かは空気と日光に裸体の身を晒すべき」であり、それは「根本的なレベルで言うなら、どれほど喚起に気を遣ったところで、戸外での滞在に勝るものはない」²³からである。さらに肌が直接空気と接することによって体内燃焼を増し、それによってより多くの熱を放出するには、服を着ずに新鮮な空気と太陽に身を晒すことが重要なのである。そうすれば、「一方では血の循環が促進され各器官により多くの血流が送り込まれ、また他方代謝と消化が刺激される」のである。²⁴

また、裸体が日光浴・水浴・空気浴等の自然治癒療法に関係してきた背景には、身体の鍛錬という側面がある。とりわけ寒さや冷たさという自然の厳しさに直面させることによって、身体は鍛えられ抵抗力を増すというものであり、ここにおいても裸体は、個人の身体の健康という枠組みのもとで語られている。

そのような個人の健康という側面の強かった自然治癒療法を「信条告白」²⁵の次元へと移行させた人物としては、1888年に裸体運動史上初の裁判沙汰を引き起こした画家のカール・ヴィルヘルム・ディーフェンバッハ (Karl Wilhelm Diefenbach) を挙げることができる。²⁶彼は、自然治癒療法で自らの病も癒されたという経験から、リクリの影響のもとと自然と調和した生活を実践する。ミュンヘン郊外の採石場の跡地で家族や弟子達と、より自然に近い独特の服を身につけ素足にサンダル履きの生活を送るのである。ただ、ディーフェンバッハは単に自然の力による個人の身体の健康だけを目指していたのではない。リクリと並んでディーフェンバッハに大きな影響を与えた人物として、「菜食主義の創始者にして特定の宗派には属さない宗教家」²⁷エデュアルト・バルツァー (Eduard Baltzer) の名が挙げられる。バルツァーは、「無限の自然という緑なすドームの中に生きる宗教的社会主義」を志向し、その世界では、「美しい人間が生き、それは身体的なものの育成によってのみ到達することができる」とし、さらに「それこそ健康、美の条件であり、宗教的義務」だとしている。²⁸バルツァーのそのような思想をディーフェンバッハは自らの作品の中に取り入れ、自然と直接の結びつきのうちにある人間の姿を裸体という形で描く。個人の健康は自然との調和のうちにおかれ、そして自然に最も近い形としての裸体という姿は美の領域で語られる。その中でバルツァーの言葉に見られるとおり、健康=美、あるいは、健康な身体=美しい身体という構図が定着しているのである。

このように裸体というありのままの身体そのものが美学的な観点から語られるとき、それは単なる健康という次元を超えている。そもそも生活改革運動そのものは、近代の工業化によってもたらされた様々な弊害、とりわけ人間に対する弊害から逃れようとする、もしくはそこに反旗を翻す運動ととらえることができるが、裸体運動、あるいは裸体の神話化においてそのような反近代・反文明という思想は特別の地位を与えられている。文明化によって人間は自然と切り離され、便利な生活のもとで軟弱な存在となりつつある。鍛錬なしに健康な身体を手にすることはできない。実際リクリ自身、自分たちの子供に自然のもとでの厳しいトレーニングを課し、自らそれを「肉体的かつ道徳的強化学校」と呼んでもいる。²⁹そして、自然のもとでそのようにして得られた身体こそ美しい身体とされるのである。「裸体においてのみ、君たちは美と健康を見つける」³⁰とされるなら、その「裸体」はけっしてひ弱なものあつてはならないのである。

そのように裸体が美的な身体の理想という観点のもとで語られるとき、裸体は芸術作品として提示される。とりわけ「官能性やセクシュアリティを拭き去った古代もしくは古典的な文脈に置かれ、それによって芸術作品へと高められる」³¹のである。そこに一世紀以上前にヴィンケルマンが再発見したギリシア美の理想的な身体が再び投影されたのは言うまでもない。

ただし、裸体は単に古典・古代の文脈に芸術作品として置かれるだけではない。この19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀転換期、とりわけ近代化・文明化という流れのもとで様々な新たな事態が生まれてきている。文明化のもと、「人間は軟弱化のプロセスのうちにいる」³²とするなら、そのもとで危機に晒されているのは「男らしさの理想」である。19世紀全体を通して、「女がより女らしく、男がより男らしくなればなるほど・・・社会と国家はより健全になる」³³とされ、その思想は国民国家の建設やブルジョアジーの「進歩」の理想、そして強力に推し進められる帝国主義が必用とするものに合致していた。そのもとで、それまで宗教がもっていた役割をとりわけ医学が受け持つようになる。³⁴つまり、病気と健康を道徳的な見地から再定義していくのである。そのもとで性的放縦や精神異常は「不健康」なものとして徹底的に周縁へと追いやられ、健康な身体と健康な精神は不可分という、身体をめぐっての新たな神話が構築されていくのである。要するに健康=善、病気=悪という図式が定着していくのである。そして、社会や国家の形成に与ること、そのための「健全な身体」をもつことこそ男らしさの理想として固定化されていくのである。男は、

「身体を鍛え、戦争という体験を通過し、己の名誉を守り、そしてそれにふさわしい性格を鑄造していくことを通して」、「ひとつの理想としての近代の男らしさ」³⁵の基準を達成しようとするのである。

ところがブルジョア社会が比較的安定してくると、逆にその理想が破綻し始める、というより理想の破綻が顕在化してくる。その原因として、一つには女性の進出を挙げることができる。もちろんそのもとで「女性」の再定義もなされていくのであるが、相対的に「男らしくない男」が増えてくるのであり、その登場は男らしさの危機とともに、社会の危機ともとらえられるのである。

裸体運動における身体美の理想は、そのような背景のもとにも置くことができる。さらに裸体運動は、世紀末の頹廢概念に対抗する位置づけも与えられる。そこでは文明のもとの都市の退廢的な姿が描き出されている。裸体運動における身体美の理想は、そのような男らしさの危機のもとの男らしさの再強化と密接に関連していると言することができるのである。

そのもとで力強い身体が一つの理想として語られ、ギリシアの裸体の美の理想に加え、さらに19世紀前半から続く体操運動の流れもここに合流する。「全ての面においてトレーニングを積んだ身体が新たな理想となった」のであり、日光-空気浴施設の多くに、体操、競技、そしてスポーツのための施設が併設され、裸体運動は裸体体操にも力を入れるようになるのである。³⁶

そのように裸体運動においては、身体、精神そして魂の調和が理想とされ、美しく力強い身体が徳の担い手としての神話化されていくのである。

3. 性的なものの純化

裸体運動にとって、当時の道徳観が一番大きな障害となっていたのは言うまでもない。それは単にキリスト教道徳やブルジョアモラルからの観念上の攻撃というレベルにとどまるものではなく、裸体運動に関係した多くの人間が検挙されるという事態も含め、当局からの何らかの措置を受けている。裸体運動の歴史は、一面では「検閲、社会上のモラルそして教会との戦い」³⁷でもある。

19世紀から20世紀にかけての世紀転換期、もちろん芸術上の審美的なレベルでの裸体はすでに確立され、医学やポルノの領域を除いて、裸体は芸術上の領域でのみ語られるものであった。ただそれはあくまで「芸術家と公衆との間の暗黙の契約」であり、³⁸もちろん社会の公の場での裸体を晒すことは許されないことである。とりわけカトリックの側からの攻撃は激しく、裸体運動は不道徳の象徴ともされていた。

実際、ディーフェンバッハは検挙されて有罪判決を受け、芸術的な像ですら、それが美術館や博物館の閉ざされた空間ではなく、不特定多数が行き交う公の場に置かれると大問題となっている。また、川や池での裸体での水浴びという、ワンダーフォーゲル運動においてよく見られる行為も攻撃の対象になり、第一次世界大戦以降においても、なお頻繁に告発の対象となっているのである。

³⁹道徳観をめぐるそのような状況のもと、裸体運動がとった防衛策は、おそらく防衛という受動的なものではない。むしろそのような既存の道徳を徹底的に攻撃していくのである。時としてそれは攻撃といったレベルのものですらなく、既存の道徳の側からの攻撃を黙殺するか笑い飛ばすようなものでもあったりする。

まず彼らは身体を新たに定義し直し、新たな身体イメージを作り上げていく。もちろんその出発点には身体の「健康」がある。さらにその根本には自然のもつ力、とりわけ日光や大気と触れることによって身体は健康になり、裸体はより直接的に自然と触れるという点において、もっとも優れた手段とされる。「健康」は、病気に対する予防策として抵抗力を増すという考えとつながり、身体

の抵抗力を増すためには身体を鍛えなくてはならないとされる。そのようにして「健康」という概念は力強い身体という一つの理念へと移行していく。その背景には、「弱々しい身体」への忌避、あるいは身体の弱体化への危機感が潜んでいる。もちろん弱々しい身体の否定はこの19世紀から20世紀にかけての世紀転換期に始まったことではなく、近代国家建設という文脈のもと、古くから一貫して語られ続けてきたことである。国家建設・国力増強には、人口を増やすことが必要であり、そのために個人のレベルでの力強い身体が求められる。さらにそれは身体面のみの問題ではなく、刻苦勉励を旨とする精神的なレベルでの力強さも必要とされるのである。身体をめぐるその要求は、ブルジョアジーの利害・理念とも一致するものであり、19世紀全体を通じ一貫して強化されていく。

そのような状況のもと推し進められた工業化の中で、身体は逆に「弱体化」していくことになる。少なくとも、生活改革運動の高まりはその事実を示している。工業化によって労働者は過酷な労働へと追いやられ、また都市部の急激な人口増による環境の悪化で労働者のみならず、都市の市民層も身体を損なわれていく。国力増強、あるいは生産性向上というブルジョワジーの要求のもと打ち出された「力強い身体」という理念が、逆にそれと相反する身体を生み出しているのはある意味一つの矛盾ではある。そこで裸体運動はその矛盾をもたらした工業化に対し、その工業化をさらに広い文脈に置いて攻撃を加える。つまり、近代化や文明化そのものを攻撃の対象とするのである。

まず、工業化のもとで破壊されてしまった自然との結びつきが強調され、その関係の再生が主張される。人間は自然の一部であると考え、都会と田舎を対比的にとらえる語り方はこの時代のお気に入りであり、自然との一体化という「現実逃避」のうちに社会的・個人的な問題の全ては解決されると信じられてもいた。「自然との完全なる調和にとけ込むことは至福の喜びである。そこでは生活が我々を打ちのめす怒りと痛みと傷のすべてが幸福のうちに癒されていくのである。」⁴⁰ そのとき、自然をより直接的に感じることでできる裸体が理想化されるのは言うまでもない。また、そのような失われた自然をめぐる探求は、原初の自然状態へと行き着く。そこでは人間は「裸」であり罪を知らなかった、そして人間はその原初の自然状態、「楽園」を追われた存在であり、その時点から墮落が始まったのだと。そして原初の人間は、その後の「罪」の一切を免れていると。つまり、最も純粋な存在としての原初の人間が指定され、その姿、つまり裸体が理念化されていくのである。そのもとで裸体は、「自然」「無垢」「自由」そして「真実」という概念と同義で語られるのである。⁴¹ そのようにして、裸体そのものは純化されていく。

さらに、工業化とそのもとでの人間の弱体化への攻撃は、工業化をリードするブルジョアジーとその道徳にも向けられる。「エロチックな目的なしに裸体を想像することができないという考えこそ、自らが取るに足らぬエロチックな考えにとらえられているということの表現である。」⁴² そのように、彼らは性をめぐって確立されたモラルこそ、一般的な没落の兆候として逆に攻撃を加えるのである。その攻撃は、性のモラルを超え、ある意味、性に対する欲望そのものにも向けられる。

性をめぐる欲望そのものに関する問題は、衣服に関して象徴的に表れている。生活改革運動の中で従来の身体を拘束する服に対する不信は根強く、さまざまな形で「改良服」が考案されている。しかし、裸体運動家にとって「最良の服は、服を着ないことである。」⁴³ 「自然はどんな衣服も知らない」、⁴⁴ 衣服に関して、裸体運動の一関係者はそのように語る。人間が服を身につけるようになったのは、「先ず第一に虚栄心、自己をよく見せようとする欲求」に駆り立てられてのことであり、「次いで気候上の要求」によるとされる。人間は服を着ることによって羞恥心を覚え、さらに身体と自然との間に衣服が介在することによって、自然と直接的な接触を失い、そして身体は虚弱になっていくのである。⁴⁵ さらに「衣服こそ性的欲望を刺激する」⁴⁶ ものであり、裸体の無垢性が強調される。つまり裸体に「不純さを見ることは、墮落と不自然さ、そして自然とともにある生活の抑

圧を証明している」のであり、裸体と衣服が対比されて語られるとき、裸体は活力や健康と、一方衣服は頹廢と同義語とされるのである。47そこでは逆に、衣服こそ性的刺激を呼び起こすものであり、逆に裸体には刺激を呼び起こす「秘密」がないので、むしろ性的欲望を抑える働きがあるとまでされ、さらに裸体には教育上の効果があり、子供に裸で過ごすことを慣れさせるため、両親は子供の前では裸で過ごすべきとまで語られる。48

そのようにして裸体から性的欲望をめぐるいかがわしさは払拭され、教育上の有効性までも語られる。もちろんその最終目標は「健康な身体」＝「美しい身体」であるが、その背景にはソーシャルダーウィニズムからくる人種論的な不安感が見え隠れしている。弱い人間は生き延びることはできない。それは単に個人の問題ではなく、人種論的なレベルへと敷衍される。

配偶者の選択にあたって、顔の美しさ、華やかな衣服、持参金と「ふくらんだ財布」のみが判断の基準となっている今日の時代において、我々は目標からはまだまだ遠い。我々が意図する結婚による結びつきの第一の根本条件として、何はさておきまず身体のすべての完全なる健康と美が求められねばならない。しかし、どうしてそのようなことは起こりえよう。結婚を控えたものが正常な身体を思い描くこともできなければ、それを求めるすべも価値づけるすべも知らないとしたなら、そして同様に二人の結びつきの前に、互いの身体をそのありのままの裸体のもとで知るという機会が二人にないとするなら。この問いに、今日満足ゆく形で答えるのは不可能である。（略）

それゆえ、結婚というものは利己的なものではなく、また男と女の共生のみにではなく、先ず第一に子孫、つまり「品種目的」に仕えるものであるという考えに我々は馴染まなくては行けない。単なる生殖ではなく、より高められたものへの生殖を目指すべきである。（略）その後何世代にもわたる幸福と不幸は、生殖にかかっているのである。49

裸体運動のイデオロギー化への貢献大であったハインリヒ・プードア（Heinrich Pudor）やリヒャルト・ウンゲヴィッター（Richard Ungewitter）は、裸体運動を「淘汰」というキーワードのもと民族衛生学の中に位置づけていく。そのとき性への欲望は、単にそれ自身のために存在するのではなく、「人種の高貴化のための生殖という集団的な目的のため」50に存在するとされる。そして裸体は、配偶者の正しい選択を容易にするのである。つまり、服を纏っている、身体そのものの美醜を判断できないのであり、ありのままの身体を見ることによって、相手がより優れた子孫を残すにふさわしい美しく健康な身体を持っているかを判断できるのである。51

ここにおいて、性は欲望から切り離され、それと同時に、少なくとも彼らの理論において、裸体からそのいかがわしさは払拭される。もちろんそのような考えは、裸体運動の広まりに一定程度貢献したとはいえ、まだまだ「秘儀的レベル」52を超えゆくものではなく、裸体運動は、「法と教会というブルジョアモラルが依拠する二大勢力」とは依然として緊張関係を続けていくのである。53

より現実的なレベルで、裸体運動の社会への浸透に貢献したのは、ディーフェンバハの弟子にして「性的な身体に宗教的-世界観的聖性を纏わせ、神秘的な神聖化によって裸体を高貴なるものにし、それによって公衆に受け入れやすいものとするすべを心得ていた」54画家のフィドゥス（Fidus）である。もちろんフィドゥスもまた人種論的な傾向を持ち、彼にとって「美のイメージは、ゲルマンに典型的な要素と解け合う」ものともなっている。しかし、彼の代表作„Lichtgebet“に見られるように、太陽の光を志向する裸体という描き方の中で身体から性的なイメージは払拭され、そのもとで魂の純粋性が讃えられる。そのような身体が提示されことによって、裸体に対する社会一般の拒否感とは和らげられていくのである。実際、19世紀末に生まれたワンダーフォーゲル運動において、

フィドゥスの描くイラストはかなりの人気を博していた。また、写真という新たなメディアの発達も裸体運動の浸透には貢献している。この時代、自然を背景にした裸体写真が多く公にされている。裸体は閉ざされた密室から自然のもとに移され、それによってフィドゥスのイラスト同様、裸体からいかがわしさがぬぐい去られていくのである。

ただ、裸体運動の社会への浸透を考えると、ワンダーフォーゲル運動の果たした功績を落とすことはできない。

4. 身体の「解放」

前にも触れたとおり、裸体運動を含む生活改革運動全般が脚光を浴びた背景には、工業化のもとでの都市の「荒廃」がある。工業化により都市に大量の住民が流れ込み、その状況に対応する環境整備が追いつかぬまま、荒廃していく都市の姿は至るところで報告されている。

たとえば、クラブは都市への急激な人口流入について触れている。1871年時点でドイツの人口の3分の2はまだ地方に住んでいたが第一次世界大戦前には、その比率は逆転している。1850年代にベルリンとハンブルクをのぞいて大都会と呼べる都市はなかったが、1877年にはそれは12を数え、人口2万から10万の中規模の都市は88にまで増えている。その後も大都市は膨張を続け、1890年には16、1900年には33、そして1905年には41を数えるに至る。⁵⁵

同じようにアンドリツキーは、1871年時点で全ドイツ人口の3分の2が人口2000人以下の自治体に暮らし、人口10万以上の都会の住民は1/20以下にすぎないが、1910年になるとその数は1/5以上になるとしている。そのもとでベルリンの人口は1850年から1910年にかけて5倍となり、ルール工業地帯の中心都市エッセンではその数は30倍ともなっている。そのような急激な人口増のなかで最も問題とされたのが住環境である。都市に流入してきた多くの人間は、「Mietskaserne」と呼ばれる住宅に暮らし劣悪な住環境に甘んじざるを得なかった。「ベルリン人口の10%が光の差さない湿っぽい部屋に暮らし、5分の1の住民が一部屋を平均6人で共有し」、「貧しい人々には、光、空気そして太陽が欠けている」とされ、その状況が病気、性病、少年犯罪、飲酒の温床として問題視されていたのである。⁵⁶

また工業化による都市への人口流入は単に都市の住環境の劣悪化のみを招いたわけではない。労働の現場においても屋外での労働が減少し、屋内での労働が増加する。生産性を上げるという至上命題のもと、ほとんど休息を取ることも許されず長時間の過酷な労働を課せられる労働者にとって、屋内での労働は、住環境の悪さとともにさらに悲惨な状況を生み出すことになるのである。労働者の多くは、家にしろ労働の現場にしろ、一日のほとんどをそのような閉ざされた空間、つまり空気の循環のない淀んだ空気のもとで過ごさざるを得ないのである。それが、結核や貧血といった病気の温床ともなっている。

生活改革運動の多くは、そのような現状を前に生まれてきたのであるが、正規の医者もそのような現実に目を向けるようになる。屋外での運動が勧められ、さらに「一日一度の散歩では不十分で、少なくとも一週間に一度は太陽のもとでのハイキング、半年ないし一年に一度の転地」⁵⁷を勧める医者も登場してくる。「新鮮な空気への憧れ」には単なる憧れという次元を超えた切実なものがあり、比較的余裕のある市民階級の間では、林間・臨海学校や山岳地帯への転地という形で、「都市の外へ」という意識は実践されることになる。⁵⁸19世紀の90年代に誕生したワンダーフォーゲル運動も、そのような「都市の外へ」という思想の中に位置づけることができる。

野山を歩き回るという行為が、ワンダーフォーゲル運動という一つの運動へと発展していくプロセスの中で、やはり「都市」との関連は重要である。そもそもその運動は、上に見たように急激に大都市化していくベルリン郊外の町で生まれている。都市の劣悪な環境から逃れてきた住民が生活する「自然」がまだ残る「郊外」という枠組みの中でワンダーフォーゲルは生まれている。その後のワンダーフォーゲル運動の展開と広まりについてはここで語るまでもないが、裸体運動の発展にはこのワンダーフォーゲル運動の浸透が一定程度の役割を果たしている。ワンダーフォーゲル運動の担い手自体、その点に関してどこまで意識しているかに差はあるが、もともと反工業化、反都市といった思想性のもと、新たな身体を意識するという点では、裸体運動とこのワンダーフォーゲル運動は共通点を持っている。

実際、ワンダーフォーゲル運動は裸体運動の浸透にかなりの程度貢献している。19世紀の遅い時期になっても、北欧やロシアと違いドイツではまだ自然の中での水浴びは一般的ではなかった。ようやく19世紀末になってドイツでも入浴観が変化し、とりわけ若者達の間で裸体での入浴が徐々に浸透し、ワンダーフォーゲル運動では、野山を歩き回るなかで、人目を離れた湖や川で服を脱いで泳ぐというのは一般的になっていき、中にはキャンプ中裸で過ごすグループもあった。⁵⁹このような点において、ワンダーフォーゲル運動は裸体に対する拒否感を和らげ、裸体運動の浸透に一定程度の役割を果たしていたと言える。

今や裸の身体が太陽の下に立ち、風がその身体を撫でていく・・・天に向かって腕を伸ばすと、太陽からとある感情が届き、言葉にはできぬほど甘く清らかな風を身に受けると、心は祈りのように叫ぶ、おお太陽よ、おお私の身体よ、どれほどおまえを探し求め、そして知らなかったことか！どれほどの命の力がこの身体を流れていくことか、身体が裸体のまま風を飲むとき。⁶⁰

ここに見られる新たな身体感覚、身体の解放感を、多くの人間とりわけ若者達は共有し、それが裸体運動へとつながっている。それは逆に、意識するとしないとにかかわらず、身体に課せられた圧力が重石のようにのしかかり、ゆっくり時間をかけてダメージを与えていることを示している。

5. 語られる「身体」— この身体は誰のものか

身体の健康を意識するという点により直接的なルーツを持つ裸体運動が、工業化・近代化の大きな流れの中、あるいは当時の社会の拘束感の中で、個人の健康という次元を超え、身体そのものの新たな意識へ向かったとするなら、その方向は必ずしも単線的なものではない。ワンダーフォーゲル運動が親近感を覚える裸体と、「美しい身体」を志向する裸体とは、時に交差しながら時に全く別の方向性を目指す。新たな身体意識は、身体の解放につながる一方、また新たな拘束をも生み出している。「美しい身体」は、身体の新たな規範化であり、身体にまた様々な重石を乗せることにもなる。

自然との接点を失い、工業化・近代化、あるいは文明化のプロセスの中で本来の力を失い、弱体化に向かっていると語られてきた身体を、裸体運動は取り戻そうとした。ただ、その中で、身体は誰のものでもない自分の身体として解放されたという側面をみることもできるが、それはまた新たな意味づけを招くことによって、また別のシステムの中に組み込まれることにもつながっている。その意味で、やはり身体は拘束され続ける。もちろん、ワンダーフォーゲル運動や、ここではあまり触れることのできなかつたイサドラ・ダンカン (Isadora Duncan) に代表されるダンス、あるい

はアドルフ・コッホ (Adolf Koch) に見られる社会主義的観点のもとでの裸体運動は身体の解放感に裏打ちされたものであり、それは民族衛生学の流れに位置づけられる「美しい身体」とは全く別物かもしれない。ただ、それが民族主義的なものであれ、より個人的なものであれ、やはりそこに身体に対する新たな意味づけを求めてしまうなら、両者の間の線引きは必ずしも明確ではない。

¹ Uwe Schneider: Nacktkultur im Kaiserreich, in: Handbuch zur „Völkischen Bewegung“ 1871–1918, Hrsg. von Uwe Puschner. München 1996, S. 411.

² Ulrich Linse: Zeitbild Jahrhundertwende. in: >Wir sind nackt und nennen uns Du< Von Lichtfreunden und Sonnenkämpfern. Eine Geschichte der Freikörperkultur. Hrsg. von Michael Andritzky, Thomas Rautenberg. Gießen 1989, S. 26.

もちろんそのような捉え方は一面的であり、特に第一次世界大戦の敗戦による民族的危機意識のもと、裸体運動のイデオロギー化がさらに強化されたのもまた事実である。

³ Schneider, S. 411。

⁴ 生活改善運動は、当時弾圧の対象だった社会主義の隠れ蓑にもなっていた。

Vgl., Wolfgang R. Krabbe: Gesellschaftsveränderung durch Lebensreform. Göttingen. 1974, S.154

⁵ Linse, S.16–17.

⁶ Uwe Heyll: Wasser, Fasten, Luft und Licht. Die Geschichte der Naturheilkunde in Deutschland. Frankfurt/Main 2006, S.42. 以下, Rikli もしくは Rikli の療法に関する記述は、主に同書に拠っている。

⁷ Schneider(1996), S.412.

⁸ Ebd., S.34

⁹ Ebd., S.42

¹⁰ Ebd.

¹¹ zitiert aus Linse(1989), S.17.

¹² Ebd.

¹³ Schneider(1996), S.412.

¹⁴ Heyll(2006), S.83.

¹⁵ zitiert aus Heyll(2006), S.83

¹⁶ Ebd.

¹⁷ Ebd.

¹⁸ Ebd., S.84.

¹⁹ Ebd., S.85.

²⁰ Ebd.

²¹ Ebd., S.86.

²² Zitiert aus Heyll, S. 86

²³ Ebd., S.95.

²⁴ Krabbe(1974), S. 98

²⁵ Linse(1989), S.17.

²⁶ 日光-空気浴の施設の中で、裸でいるのを見られたというもの。Vgl., Krabbe(1974), S.97.

²⁷ Schneider, 414

²⁸ Ebd.

²⁹ Heyll, S.88.

³⁰ Heinrich Pudor, hier zitiert aus Schneider, S. 417

³¹ Schneider, S. 418

³² Zitiert aus Krabbe, S. 98

³³ C. Wilmanns, zitiert von Gerorge L. Mosse: The Image of Man. New York 1996, p.55

-
- 34 新たな身体観の構築に関しては、主に上記 Mosse(1996), S.56-76(The Countertype)参照。
- 35 Mosse, S. 76.
- 36 Linse, S. 17-18.
- 37 Schneider, S. 418.
- 38 Andritzky, S. 21-22.
- 39 Andritzky, 22-
- 40 Heinrich Pudor, hier zitiert aus Krabbe, S. 103.
- 41 Schneider, S. 418.
- 42 Richard Ungewitter, hier zitiert aus Krabbe, S. 99.
- 43 Linse, S. 19.
- 44 Zitiert aus Krabbe, S. 98.
- 45 Krabbe, S. 98.
- 46 Linse, S. 19.
- 47 Krabbe, S. 99
- 48 Krabbe, S. 100
- 49 Ungewitter, hier zitiert aus Andritzky(hrsg): (前掲)>Wirs sind nackt und nennen uns Du<, S. 142.
- 50 Linse, S. 19.
- 51 Krabbe, S.101-102.
- 52 Krabbe, S. 146.
- 53 Schneider, S. 424-425.
- 54 Linse, 24.
- 55 Krabbe, S. 16.
- 56 Andritzky, S. 4.
- 57 Linse, S.15.
- 58 Vgl., Linse, ebd.
- 59 Vgl., Krabbe, S. 95-96.
- 60 Zitiert aus Andritzky, S. 5.

平成23年（2011）11月1日受理

平成23年（2011）12月31日発行